

2022年4月24日（日）

宣 教 「傷だらけの復活の主イエス」

聖 書：ヨハネによる福音書20章19節～23節

みなさん、おはようございます。

今日の聖書の個所には、復活された主イエスが弟子たちに現れた場面が記されています。イエスが弟子たちに表れたことは、マルコによる福音書にも、ルカによる福音書、マタイによる福音書にも、そしてこのヨハネによる福音書にも記されています。

そもそも今日の4つの福音書のまとめられた時期は、マルコ、そしてルカとマタイ、それから少し遅れてヨハネとなっています。

共に聖書を学び、愛なる神さまの声を聞きましょう。

◆イエス、弟子たちに現れる

今でいう日曜日の明け方イエスは復活され、ヨハネによる福音書によれば、その日の夕方、弟子たちに姿を表されています。

19:その日、すなわち週の初めの日の夕方、弟子たちはユダヤ人を恐れて、自分たちのいる家の戸に鍵をかけていた。そこへ、イエスが来て真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と言われた、とあります。

イエスの弟子たちは、ユダヤの当局者を恐れて、秘密の場所である家に隠れていたようです。弟子は12人ですが、イエスを裏切ったイスカリオテのユダは自殺してすでにこの世にはいませんでした。また弟子の一人であるトマスという人物も理由は分かりませんがこの時いませんでした。ですからその家には10人の弟子たちがいたことになります。「自分たちのいる家の戸に鍵をかけていた。」という表現から状況の厳しさが伝わって来ます。誰も家に入ってきて来れないように外部と遮断して声をひそめて弟子たちは過ごしていたのだと思われます。家に隠れて過ごすということは大変なことだと思います。

今、ウクライナのマリウポリの地下のシェルターに隠れて過ごしているウクライナの民間人1000人ほどの人たちがいると伝えられています。中には幼いこどもたちもいるようです。ロシア軍の攻撃からいのちが守られることを世界中の人たちが願いわたしたちも祈っています。イエスの弟子たちも恐れと怯えの緊張の中で、家のすべての戸に鍵をかけて息を潜めて過ごしていたのです。そこへ、イエスが来て真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と

言われたのです。復活されたイエスが、来られたのです。戸は鍵がかかっているけれども、復活されたイエスさまは来ることに、何の問題もなかったのです。

イエスさまは肉体を持ちながらもあたかも風のように入って来られたのです。霊の身体ということだと思います。ここから学ぶことは、今でも主イエスさまは、わたしたちの所へ私たちの心の中へ入って来ることができる方だということです。

そして恐れて怯えている弟子たちに、「あなたがたに平和があるように」と語られたのです。「平和があるように」とは平安があるように、安心するように、やすらかであるようにとの励ましと慰めの言葉です。イエスさまは、何より、恐れている者に、慰めと励ましのことばを語ってくださるのです。そして、その言葉は外がどのような厳しい状況の中でも、その場が平和、平安に包まれる場となるということなのです。これこそが活ける神さまの働きなのです。

主イエスは愛する弟子たちに、20 節にあるように、手とわき腹とをお見せになったのです。主イエスの手には、十字架につけられ時、手に刺された釘の跡があり、わき腹には槍で突かれた跡がなまなましく残っていたのです。

復活されたイエスの身体は、殴られたり、ムチ打たれて血を流されて受けた傷、十字架につけられた傷だらけだったのです。この傷は、人間の罪を担う、背負う、そのことによって罪を贖う傷であったのです。復活されたイエスさまの傷跡は残ったままなのです。それが、愛に生きられた私たちの主イエス・キリストです。

伝道者、パウロはこの十字架の主イエスを誇る、と告白しました。パウロは自分の生まれや才能を始め他の何ものをも誇らない、絶対視しないという生き方を主イエスを知って始めて行きました。神と主イエスの前に低くあること謙虚であることが何より大切なこととし、そこで新しくされた自分を取り戻して生きて行ったのです。その道は今を生きるわたしたちにもつながっていることを覺えたいのです。

復活された傷を負われたイエスに出会って、弟子たちは、「主を見て喜んだ。」

とヨハネの福音書では言われています。ちなみに一番古いマルコ福音書ではイエスは弟子たちの「その不信仰とかたくなな心をおとがめになった。」と報告されています。それは、弟子たちより早く復活のイエスに出会った女性たちの報告を弟子たちは疑って、イエスの復活を信じなかったからです。またマタイ福音書では「疑う者もいた。」とあり、ルカ福音書では「恐れおののき亡霊を見ているのだと思った。」とあります。一番古い、マルコ福音書が一番弟子たちには厳しいようです。これはマルコが一番古い報告なので真実に近いとも言えますが、イエスの弟子たちへの愛から出ている厳しさのようにも私には思えるの

です。

ヨハネによる福音書がまとめられた時期は、キリスト者、教会にとってローマ帝国の迫害が厳しくなっていく時でもありました。それ故、主イエスのことばは深い慰めを感じることができるように思えます。

21:イエスは重ねて言われた。「あなたがたに平和があるように。父が

わたしをお遣わしになったように、わたしもあなたがたを遣わす。」

イエスさまは弟子たちのことを心配して、平和を平安を祈ってくださったのです。今も苦難を生きる人々を思ってくださいているのです。

復活されたイエスさまは愛する弟子たちを厳しいこの世界に派遣されたのです。「父がわたしをお遣わしになったように、わたしもあなたがたを遣わす。」と。この弟子の派遣は、すべての福音書に共通しています。

22:そう言ってから、彼らに息を吹きかけて言われた。「聖霊を受けなさい。

この場面は、ヨハネによる福音書の聖霊降臨・ペンテコステと言われています。弟子たちはもちろんのこと、今ここにいる私たちも愛なるイエスさまからいのちの息を受けて、この世界に遣わされるということなのです。教会の中で、家族の中へ、地域へ、社会へ遣わされるのです。主イエスから頂いた愛の使命を持って出かけるのです。その働きに小さい、大きいの違いはないのです。時代や場所を超えて、その遣わされた働きが神さまから託された大切な貴い働きなのです。

そして、イエスさまが弟子たちに与えられた大切な使命は、「罪の赦し」であることを心に留めたいと思います。罪とはわたしたち人間が、生きる的をはずして、自己中心の状態であることだと言われます。そこに罪や過ちが生じて来ます。

「**23:**だれの罪でも、あなたがたが赦せば、その罪は赦される。だれの罪

でも、あなたがたが赦さなければ、赦されないまま残る。」とイエスさまは語っておられます。

罪を赦したり赦されたりすることは、人間誰にとっても本当に難しいことです。昔、高齢になられた牧師が、「わたしはどうしてもゆるすことのできない3人の人がいる。」と語っておられたそうです。それほど、人を赦す、人から赦されるということは不可能に思えるほどに困難なことなのだと思います。

そういう私も昔出会った赦すことの難しい人たちがいます。

「だれの罪でも、誰の過ちでも、あなたがたが赦せば、その罪は赦される。」

「赦す」という漢字の語源は、固く縛ったものを緩（ゆる）くすること

から生まれていると言われます。また「赦さないとは、縛ること、縛ったままにしておくこと」と言われます。

イエスさまは、自分を十字架につけた権力者たちを、十字架につけた当時の人々を、そして弱さのゆえに自分を見捨てた弟子たちを赦されたのです。

「あなたがたが赦さなければ、赦されないまま残る。」

「赦さなければ」とは、縛ったままにしておく、心にこだわるり続けるなら、いつまでも、赦さないまま残るのです。それは人と自分をも縛り続けることになってしまうのです。それがずっと続いて行くのです。それで良いのでしょうか。そうは思えません。

人を赦すことは、「本当にできない。」と思えるほどに困難なことです。たとえ自分の力ではできなくても、十字架につかれたイエスさまの力によって、イエスに従おうとする者たちは、傷だらけの復活の主イエスから自分の罪や過ちを赦され、あたたかく力強い、いのちの息を受けて、心を解放され、自由にされ、他人の過ちや罪を赦す、緩めることのできる自由を与えられているのだということを気づかれたのです。

たとえ困難でも祈って願って行けば、それを実行する力をも主は、必ず与えてくださることを信じます。

信仰者の赦しの愛と希望と信仰の力は、神さまの憐みの中で、十字架につけられた傷だらけの復活の主イエスさまから確かに注がれることを今日共に信じましょう。

わたしたち日々新たにされて互いに大切に仕合って生きて行くことを願います。

主の平安を祈ります。